

# 勝利の悲哀

—— 映画文学人生論

原作：徳富蘆花 (1906) 「黒潮」

参考；『謀反論』 (1911) 「第一高等学校での講演」

『不如帰』 (1898-99) 「国民新聞」

『思出の記』 (1900-01) 「国民新聞」

『みみずのたはこと』 (1913) 「新橋堂」

『黒い眼と茶色の目』 (1914) 「新橋堂」

日露戦争の終局に当りて、一種の悲哀、煩悶、不満、失望を感じざりし者幾人かある

徳富蘆花が第一高等学校で行った講演の草稿を読む。タイトルは『勝利の悲哀』と『謀反論』、講演を行った日は前者が日露戦争の講話締結の翌明治三十九年十二月十日、後者が大逆事件裁判直後の明治四十四年二月一日である。

勝利の悲哀をなめた人物の代表として蘆花がとりあげたのはまずロシアの画家が描いたナポレオン。ナポレオンは雀が丘で黙然として眼下のモスクワを眺め、勝利の悲哀を感じている。気をとり直してモスクワに入ったが、雪に阻まれて、総崩れになり、「而してエルバの島流し、而してヤートルロー、而してセント・ヘレナ、而して死。死して彼は終に悟らざかりき」となる。

蘆花はさらに論を進めて、日露戦争の英雄児玉源太郎将軍が奉天戦後の心機まさに雀が丘の奈翁（ナポレオン）に類するものありしにはあらざるやと問う。「事實は知らざれど、世は将軍に遁世（とんせい）の志ありしと伝へぬ。彼は確に胸中或煩悶（はんもん）を覚えしなり。此（こ）は彼が大悟の機なりき。然れども……彼は突然死の手に拉（らつ）し去られぬ。生は露国の帰途、浦塩斯徳（うらじおすとつく）に於て、其死を耳にせし時、可惜（あたら）好男児、彼は日露戦争に殉死（じゆんし）せり。彼は悟らんとして悟り得ざりき、と嘆息するを禁じ得ざりき」。



# 勝利の悲哀

映画文学人生論

蘆花はロシアを訪問してトルストイに逢うなど見聞をひろめてきたこともあって、日露戦争の勝利に対してこのような醒めた見方をする事ができたが、そんな日本人は少ない。日露の講和に反対する人々による交番の焼打が続出した。兄の蘇峰が経営する『国民新聞』は、その社説で「日本国民は合衆国大統領の調停の労をとった交誼に対して、謝せねばならぬ」と書いたために、米国の恩を感じない多数の暴徒に襲撃された。

一方、『謀叛論』は、吉田松陰や西郷隆盛の例をあげ、「諸君、幸徳君らは時の政府に謀叛人と見做されて殺された。諸君、謀叛を恐れてはならぬ。恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である。謀叛人を恐れてはならぬ。自ら謀叛人となるを恐れてはならぬ」という過激な主張である。

「身を殺して魂（たましい）を殺す能わざる者を恐るるなかれ」。「肉体の死は何でもない。恐るべきは靈魂の死である」。

大逆事件で幸徳秋水ら十二人が死刑になったことは当時の文学者に大きなショックを与えた。文学者たる以上この思想問題について黙してはならないが、わたしは世の文学者とともに何もいわなかったと永井荷風は『花火』に書いている。公然と判決に抗議する気概を持っていた文学者は蘆花だけだったようだ。

心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙

（明治三十一年一月記）